

亞爾然丁時報
文藝附錄
SUPPLEMENT LITERARIO

第四卷

第貳拾貳號

或曰。郊外



FEBRERO
23
DE 1929

AÑO VI
NÚM XXIII

"El Argentín Dijo"

文藝陣(一) 美都三

文藝とは古くは文学、絵画、音楽、彫刻、建築、演劇、舞踊等の一切を包括したものであるが、この「文藝附録」の場合にはそれ程広い意味はない様である。無論、そのものは拒絶する主義ではあらうが、然して此等、文藝の諸種や、人生の他の諸現象、例へば政治とか、道徳とか、宗教とか、学問とか、実業とかいふものと対立するところの特性は何人であらうか？

文藝は如何なる特殊の組織を有し、如何なる特殊の目的によつて此の世に存するか？

文藝の人生に於ける意義如何？

随分莫然とした問題ではある。随つて、これ等に対し、随分沢山の異論もあらうが、要するに文藝に対する我々の態度は二つに別ける事が出来ると思ふ。

一は之れを鑑賞(Apreciation)すること、他は之れを理解(Understanding)することである。

学問上のことなら、之を理解すれば即ち足る。然し文藝は寧ろ鑑賞と云ふ特殊な状態に入らねば、其本来の目的に合する事が出来ぬ。恰も宗教が信仰と云ふ状態に入らねば無意味である如く、文藝は鑑賞が其の意義の全部なのである。

鑑賞へすれば、文藝に対する言は了り、又鑑賞

さへせられたならば、文藝をフからの本意は盡き、鑑賞の一字が缺けてゐる限り、文藝も何もあつたものでは無い。

換言すれば鑑賞、即文藝なり……

——と云ふたら不可いだらうか？

二、に於て一言ふべからず、人間はすべてものを理解して、それに対する自己の計画を定め、爲めに、強烈な智識欲と云ふものを植はつて、根を張る。それは狐島の磯別松、如く、牢固な根を張るものだ。

何んでも彼でも知らんとする。唯知らんとする。知りて、是は不満足と覚える。従つて未だ知り得ないものに対しては疑念の眼を注ぐ。所謂懷疑の状態である。従つて、そこに煩悶不安が伴ひであらう。大抵、疑念が起る場合はあつても、此の心理上の順序はいつても同じである。

人生全体を疑ふ不安も、眼の前に見ゆる妖怪変化の正体を疑ふ不安も、意味に於て何れも相違はない。疑つて不安を覚え、然して——「幽霊の正体見たり、砵尾花」——その馬鹿らしい正体を解したつた時、初めて、はつと安心する。安心と命と離れなく、このもはつと安心して胸襟を下すのも、場合が違ひだけ、心理上の過程に異りはなからう。

此の智識欲は如何なるものにも、嘴をつつ、こもつとしたがる。殊に近代に於ては、程々、この不安が強く明かにする。は、止むを得ぬ事だ。

詰り一般の智識が非常に発達したからであらう。
是れを以て、自分のやつてゐる事業に關する明徹微
細な理解を得やうとするのみならず、進んで自分自身
が何んであるかとも知りたがり自分が屬してゐる人生
そのものが何んであるかとも知り盡くさんとする。
是れが所謂、近代人の人生に對する懷疑煩悶であら
う。

其の同じ根本からして文藝と云ふものにも理解の要求が
起つてくるのだ。此の方は單に一時的、眼前に現れた
大入道や、一ツ目小僧が何んであらうと云ふ位の事は
済まない。吾人乃至吾人の祖先以来、頗る重大な位置
と、この生活の中におゐてゐる「文藝」とは一体何物であら
うか。

吾人は一般の習慣として、唯それと享けあつて敬へられた
然しそれが果して正当な事であらうか？
文藝など、云ふものをいじくりまわして居るのは何ん
だか、自分で思ひ込んで、のらくらと遊んで暮らす者の心地と似
た所があるやうだ。
然し一方には何んだけ、唯、遊んで暮らすとは違つて、高尚な所
があるやうにも思はれる。

一体全体文藝とは何物か？
正当に安心して之れを鑑賞してよい理由があるか？
否いか？
是れを明かにしなさい。うちは、良心に一種の不安を覚え
安心して文藝とすることも味ふことも出来ぬ。
是非この疑ひにまで来るのが、近代人の自覚と云ふも

のであらう。
此に於て多くの人は、皆それとこの疑念に對する
各種の解決と自分で作つて置かうと努力する。
然し今もつて解決を得ずして、不安の間に彷徨し
てゐるものもあらう。
或いは到底解決はつかないものと諦めて、絶望的
に此等の疑念を忘れやうと力の及ぶ人もあら
う。

又暫く他人の説に同意して之れを解決とし、或は自
ら一説をでつち上げて、無理に智識慾の自己満
足を計るもの。
結局、その人柄によつて解決のつけ方は様々であるが、
何れも理解を得やうとする智識慾の要求が必
ず、或時期に於て文藝の上に加つてくるのは否を難
い事である。

この時に生ずるものが文藝批評である。
トルストイは五十にして「懺悔録」を書き、七十にし
て「藝術とは何ぞや」を著したのも、心理上の過程は
これに外ならぬ。

かくして文藝は一面、鑑賞せらるべきものであると
共に、一面には、理解せらるべきものである。
理解は即ち、智識上の過程であり、智識上の
過程は研究である。理論である。
——と手前味噌と並べて鶴翼之陣二段目にうつる。

思ひ出

拾一冊

さやかに流れる川岸に、こもりとした柳の蔭が、
天と地との境いに、はつきりくもりをつけてゐる。
その柳の葉蔭をすかして赤煉瓦の別荘が、チラホラ
と照らし、眞青の空に眞白の雲が飛んで、絵画の
題材にやうやく油絵の中に見られるやうな景色を展
開する。

そしてそれ等の景色や清らかな空気は、たゞの目曜
を利用して町から遊びに来る人々の心を、すくしく
させてくれる。

その頃、私は少し肺病を病んでゐたので、コルドバへ出
かけやうと思つたが、店の主人のすゝめで、一月の休暇
をもらひ、このオリーヴオスに保養した。

主人の知人で、一死んだ父の遺産に何不自由なく暮し
てゐるアルヘンティナ母娘が、幸ひにもここに住んでゐ
たので、私はその家に厄介に行ふ事になつた。

主人からの手紙で、私がトラウマをうけて、この家をはじ
めて訪れたとき、今年廿五になるふか顔の面長で色の
白い眼の黒い赤い唇の、小から美しき娘が、心か
ら私を迎へてくれた。

彼女の名をアルかと云ふ。

家敷は広い庭と、大さなサロンの、それに綺麗な居
間四つに、女中部屋、コシーナ、母娘と女中の三人

暮しには余りに大さな家だつた。
その晩、食後に私は一人庭を散歩
してゐた時、女中が何んのためにか、何んの意味で
か知らぬが、アルがはこゝ東限で評判の
美人だと語り教へてくれた。

一週間もたつとアルかと私はすっかり仲よしくなつ
てしまつた。

大年前に父を失ひ兄妹とて持たふいアルがは私
をほんとうの弟の様に可愛がつてくれた。

そして彼女と彼女の母親と私と三人は毎晩の
様に食後に柳の木蔭を散歩した。

普通アルがは位の色と資産を持つてゐる女から
結婚はしてゐることも、位は何にかうでも好み
しだいに出来るだろうに、俄にゆく程ふ、アルがは
おろが、ノビエを持つてゐる凡にも見へず、コシーナ
の事は一切自分が切りまわして年老いたる母
親を養つてゐた。

まったくアルヘンティナにしては珍らしい程、家庭
的お娘だつた。

然し私は彼女の行動を一寸妙に思った。

それはアルヘンティナに秋風の立ちそめた或日曜日
の夕方だつた。

グエノスに買ひ物に出かけた私は、暗くおつてから
オリーヴオスへ歸つて来た。

所が母親は「エエの親籍へ出かけ、女中は今しがた
外出したとかで、アルが独り、縫物をして留年番
きしてゐる。

私が家へはいつて、着物を着替へてゐると、アルが
私の部屋へ来て、

「ア、御飯はもうすんだの
と聞いたので、

「え、

と答へたら、それでは二人でカフェを喰まうと、わかく
私の部屋までもつて来てくれた。

その夜は、馬鹿に蒸暑い夜で、まるで夏の再来を
思はせ、緑が気候だった。

私がカフェに、どとどとうるほしてゐると、アルが
「ア、庭はここも涼しいわ、こっちへいらつしやい」

と私を招くので、小走りに庭へ降りてやつた。

なま程度（出ると、ブドウ棚を吹く涼しい赤風が、なん
とも古へい快感を興へる。

すつかり暮れてしまつた空に星がまばらに散ら
ばつてゐる。静かお夜だ。

と、ベンコに、ならんで腰かけてゐたアルがと私の視
線が、期せずしてぶつかった。

（やつと十七に打つたばかりの私は、今から考へるこゝの
頃はまた無邪気なものだった。）
アルは微笑んだ。私は瞳に眼を下した。

しばらく二人は色々の世間話をしてゐるうちだ
なんだが、妙に感傷的になつてしまつて、アルがも
私もだまりこんでしまつた。

アルがはその時、小さな声で、父親のある人は幸
福だとお兄妹のある人は幸福だおんて、つぶや
ながら吐息をもらす。……

「アルが、貴女はなぜお嫁さんにならなさいの？。な
ぜ、ア、ア、ア、居あいの？」

「まあ、いや、ア、ア、ア、そんな事、母知らなさいわ
この私が、お父さん、お母さんに、彼女はいさ、か
面喰つて、頬をハツと紅らめて、私をにらむ真似
した。

私は要する事を、でもしたかの様に
「ごめんね、アルが」

とあやまつて話を横にそらす。
永しかつた学校生活。思ひ出に話がつると、じ
つと聞いてゐたアルがは、私の言葉をさへあつて

「あ、今晚は話してあげるは、母のいや、思ひ出を
……勿論、母が母親の乳房をさぐるが、如く、な
つかしい二八の頃。思ひ出を記憶の糸で、たぐり
ながら、静かに語りだした。

それは夢のくづれた様か、ロサの花が、はたはた

もホロくと散りゆくふくだらぬ話ふ……
思ふと云ふものは、たいがい懐しいものね、だけ
ど懐しくいゝやな思ひ出は、きれいなつはりと
忘れてしまふ事よ……
幸が下度フエス。女学校を出た。そう今から七
年前でしたわ、死んだ父の友人で、この町の資産家
の一人息子にQと云ふ人が居ましたの。
でそのQと云ふ人は、父親同志が知り合ひだったの
で妻の家へよく遊びに来るは、幸とベイルをして
遊んだわ、その中に二人はお互に愛しあつて
両親に許しをこつて結婚までしやうとしたの、然
し或日Qは幸に最後の要求をしたわ、だから幸
断然は拒つてしまつてやつたの、それからQはッ
しもあたしの家へは来ませんでした。
その後一月ばかりたつてから、この近所にあるマリア
と云ふ人が結婚するんです、隣・ルイサが知らせ
てくれた。そしてその相手の男と云ふのがQだ
つたの……所がQと交際を止めてから、既人からQ
はフエス。学校時代には名代の不良少年だったと
云ふ事を言ひ、自分は結婚してもQと共に暮
しては行けないとあきらめてゐたから、そう悲
しみもせませんでしたわ
けれど……その日、午後、Qとマリアの結婚式が
教会で挙行されて、二人の仲あつまいしい新郎

新婦が腕を組んで、教会から出て来りました。
この時まで何んとも思つてゐなかつた幸は、どうし
たものか、とてもじつと二人を見てゐられな
い衝動にかられて、眼に一杯涙を溜めたまゝ、家
へ引走り、帰つて来て、机にもたれてしく
しく泣いてしまつたの。
その時分、まだ生きてゐた父が慰めてくれまし
たわ、そしてその時から、余り男の人の心を信じな
くなりました……
話はずれだけれんですけれど……幸思つたわ
純情と云ふものは、尊いものであると云ふ事を……
若し今幸にそんな事があったら……恐らく
涙か、かこほさないで、冷たく笑つたでせう。
彼女の黒眼は涙にうるほつた。そして夜風がオ
ルガのメレーナを悲しげになつた。
「あの頃の事を考へると行せよ、自分も寂しくな
るわ、だつて幸は純情を少し失つた様ふ気か
するんですもの……けれど、世の中に生きてゆく
悲しい方便の数々を覚へましたわ……」
私の不用意に發した一言が、これ程まで彼女を悲し
ませやうとは……私は唯わけもなく悲しくなつて
涙をそそぐらした。
と彼女は「まあ、幸つたらない事をおしやべりして

しまつて許してね。だつてつりオがあんふ事を去ら
 からいけなうんだわ。彼女が過去に自分苦笑してゐるかの如く、その
 頬には寂しい微笑がたゞあった。そして……私の頬につたう涙をふいてくれながら
 いるが、私の腕を抱擁した。私は息づまる様不苦しくと驚き、彼女の胸に
 しつかりと頬をうつめた。彼女の激しい鼓動が耳もとで唄く……
 やわらかい乳房が私の頬にふれる。大抵のすり泣きがささこぼる。
 私も声を上げて泣いた。その時彼女の真紅な唇が私の唇にあしあつら
 れた事を、はつきりと記憶してゐる。

病のよくなつた私は再びブエノスの町中へ出た。その翌年、彼女は腰痛炎の手術の結果悪く
 廿六才を一期としてこの世を去つた。廿六年間の彼女の生理に於て……彼女の肉
 体に觸れる事を許されたのは恐らくこの私一人
 だけだつたらう。(完)

結末

和歌

折にふれ

TK生

夕陽さす野辺にぬかす折れども
 昔の夢をかへすすべふし
 別れ末は六つとせは過ぎゆくも
 おもひけ人はいまだ眼に見ゆ
 火と燃はしあふ唇にふれしより
 今は悲しき夢を追ふ身に
 川端の柳をそめて沈む陽に
 我が思ひは涙こそふる
 名ふし草ひきはしほみて物思ふ
 はかなき恋と誰が知るらあや
 乙女草たゞのいと夜と思へども
 逢はば散る日とわれ悔ひがらむ
 さかりわたがつばら眼を思ふらへ
 悲しきものを晝の粉雨

(6)

稿文

詩二扁

すまを

妹よさらば！

あの寂しい夜を思い出すと
俺は打んこなくセンチメンタルになる
俺は自然に涙がこぼれてくる

人間！

この世に生存してゆくには生きるより悲哀
は当然あることだ
見ろ！ 燃ゆる標を悪愛にすら失態と
云ふ悲哀があるではないか
人間とは戯曲のテーマなのだ

妹よお前は泣いてかへるんだ…人の嘲笑に…
恋から逃げられたお前は泣いた
俺も泣いた
皆んお前の憐憫の情から

然し妹よ

皆んお運命がお前に課へた青春の

試験だ

過去は過去

醜かりし過去の姿は忘れて

純か俺の妹として帰るんだ

泣け、泣けるだけ泣け
涙のかわくまで泣いてくれ、後はなんにも
ないだから

そうして、お前はかへるんだ

みじめな男

邪剣村正のさつぎをを受けとんじて

切られた肉体から鮮血がほとほと流れた

やつは

彼女は誘惑されたんだ

私は

みじめな労働者ではないか

(一九二九・一・三十五)